OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	清子は蒙古王の家庭教師となる ： 大月隆『臥龍梅』（1906年）に見る女性家庭教師表象の一側面
Author(s)	小橋, 玲治
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 2013, 47, p. 55-73
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54416
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

清子は蒙古王の家庭教師となる

── 大月隆『臥龍梅』(1906年)に見る女性家庭教師表象の一側面 ──

小 橋　玲 治

キーワード：大月隆／清水紫琴／*Villette*／ガヴァネス／女性教師の海外派遣

はじめに

筆者はすでに、世紀転換期の日本において行われた女性教師の海外派遣事業、及び同時代に見られる女性の海外雄飛の表象化について検討した。[1)] 男性たちは主に「殖民」という形で海外に目を向けた、すなわち領土的野心を伴っていたのに対し、女性たちの海外への興味とは、東洋の盟主たる日本の女性たちが同じ東洋の女性たちを導いていかねばならないという、ある種の使命感にも似た思いを伴っていたのである。その目的のため、女性たち自身によって主宰された団体は、20世紀初頭という時代にあって海外へと女性教師を派遣した。その代表的な事例が、日露戦争下の内蒙古で隠密活動にも従事した河原操子や彼女の後任である鳥居きみ子であり、暹羅へと派遣された安井てつなのであった。

しかしながら、彼女たちの活躍とは裏腹に、そのような女性教師の海外派遣事業は、同時代の作家たちの手によって異なる想像の下に再構築されることとなった。田山花袋「女教師」(『文藝倶楽部』1903年2月）や小栗風葉『青春』(『読売新聞』:「春之巻」1905年3月5日～7月15日、「夏之巻」7月16日～1906年1月1日、「秋之巻」1月10日～11月12日）などは、ヒロインが男性との恋愛に失敗してしまい、最終的に海外の学校に赴任していくという構図で書かれており、海外へと渡るというモチーフは現実において担って

いた意味を失い、恋に敗れた後の逃避として意味が後退しているのである。

先に挙げた拙稿ではここまで述べていたが、本稿ではそれらとは異なる趣向を採るテクストを挙げて考察してみたい。すなわち、女性教師が海外へと渡っていくというモチーフを、否定的な意味では捉えていない作品を本稿では取り上げる。その際、主に考察の対象とするのは大月隆なる人物によって書かれた『臥龍梅』(1906年、文学同志会)という作品である。

作者である大月隆という人物、そして彼が経営し、自らの著作の多くを発行していた文学同志会について、詳しい事はあまり分かっていない。[2)] 事典の類でも彼や文学同志会の名を見つけることができない。[3)] 当然そのような人物の物した『臥龍梅』なる作品自体、現代において顧みる人はほとんどいないであろう。しかし、『臥龍梅』は発刊四年後の1910年には『旅の佳人』と改題、再刊行されており、そのような措置が取られたからにはある程度の読者を獲得していたことは疑いえない。

この作品では、ヒロイン・北小路清子が自分の親ほどの年齢の軍人の後添えになることを拒み、逃走を続けていく。日露戦争前夜を舞台に、十代半ばの少女に過ぎなかったヒロインは、たびたび登場するロシア人や官憲たちを相手に大立ち回りを演じており、そのような女性像は当時の日本にあって異端といえるであろう。最終的には彼女は大陸へと渡り、そこでかねてよりの思い人・東鐵男と再会する。そして手に手を携え、内蒙古にまで至り、そこで彼女は王妃の家庭教師となるのである。

このあらすじからも分かるように、『臥龍梅』は明らかに内蒙古に派遣された河原操子、そして、男性と二人でということから、河原の後任として夫の龍蔵とともに渡った鳥居きみ子をも踏まえて書かれている。にもかかわらず、この作品は同時代の、同じく河原や鳥居の存在を背景としている前述の作品群とは様相を異にしているのである。本稿は、『臥龍梅』を詳細に分析していくことで、その特異性について検討することを主眼とするものである。

1. 作中で示される清子の家庭教師としての資質

先に触れたように、作者である大月隆という人物については詳しい事は全く分かっていない。ただし、大月の書くものの傾向から言っても『臥龍梅』のような物語形式のものは珍しいと言える。

既成の文学の枠に囚われないからこそ自由闊達に書けた、とも言えるかもしれない。それほどにこの作品は、悪く言えば荒唐無稽とも言えるほどに野放図な作品である。作品の広壮さを支えているのは、舞台が日本にとどまらず、大陸にまで伸びていることである。この作品の出版年である1906年にはすでに日露戦争は終結を見ているが、日露戦争前後において「戦争文学」という直接的な形ではないものの、ロシアを扱い、舞台を大陸にまで延伸している作品がいくつか存在しており、[4] 後発ではあるが『臥龍梅』もそのうちの一つと考えてよいであろう。

物語の大半を占めるのは望まぬ縁談やロシア人たちの欲望からの主人公・清子の逃避行であり、相手役であるところの鐵男はほとんど偶然のような形で清子と再会を果たす。そのようなご都合主義的な展開は、本作を文学的にはほぼ無価値なものとしている。しかしながら、いわゆる「通俗的」な作品であるならば、その通俗性を分析することで当時の人々の考えをその中から拾い出すことが可能となるであろう。

まずは、作中に登場する主人公以外の女性について考察してみたい。清子の他にも聡明な女性が幾人か登場する。最初に名が挙がるのが鐵男の婚約者・小柳光江である。光江はアメリカで「オハヨー洲国立女子大学校の教師」[5] に抜擢されながらもその栄誉を辞して帰朝すると語られるが、光江の存在はあくまで清子の母の口から鐵男に対して語られるのみで、実際には登場してこない。ゆえに実体を伴って清子の恋敵となる存在とはならない。光江の存在はただ清子の恋が単純には進まないということのみを表しているにすぎないのである。だが、それにしては光江はあまりにも才女として強調されている印象を受ける。これは、鐵男自身優秀な軍人として描かれているた

め、婚約者を持ち上げることで鐵男の優秀さを表わしていると言えるであろう。

男女の関係において、一方に他に許嫁があるという設定はよく見られるものである。例えば、『臥龍梅』刊行の同時期に『読売新聞』で連載されていた小栗風葉の『青春』も、関欽哉は実際には田舎に許嫁がおり、しかもそれが援助者の娘であるために欽哉は苦悩する。かように、許嫁の存在は、「通俗性」のための道具立てとなっているのである。

もう一人の才女、それが清子の旧友・小松原花子である。彼女はフェリス女学校[6]の教師なのだが、逃走した清子が最初に頼ったのが彼女であり、彼女の勧めで清子は同校校長で聖職者でもあるウイリヤムの家に匿われることになる。彼女は清子の逃亡劇の起点となる存在なのである。

彼女らに比して清子が勝っているものとは何であろうか。ウイリヤムの許に身を隠していた清子に追手が差し迫るが、彼女はその絶体絶命の状況にあって何も出来ずただおろおろする存在ではない。

> (…) 最早一刻も猶予すべきに非ず、安閑として拱手するは不可也。と其の逃走の方法を考へたるも事情が事情場所が場所なればをいそれと好案も浮ばず、身体茲に谷まりて気を焦るのみにて如何ともすべからず只拱手手段方法に沈思しぬ。
>
> 清子は沈思専心意を凝して考へたるも今此の場合此家を飛び出したればとて必ず厳しき探偵の重囲に陥り到底逃れ難きは火を見るよりも明かなり、仮令我死を以て此場合を逃走し見んかと勇気百倍猛虎拳殺せんばかりに意気溢れたる眼光、胸中既に非常なる大決心を発したる風情にて直様ウイリヤム氏のミスエスに依頼し奥の化粧室に入り散髪機械を取り出し惜気もなく丈に延びたる緑の黒髪を五分刈になし墨にて眉を広く直しテー、ウイリヤム氏の背広服を着用し鳥打帽子を冠りて旅行の用意を調へたり、[7]

この切羽詰まった状況にもかかわらず、清子は「沈思」するほどの落ち着きぶり、決心すると女の命とも言うべき黒髪をばっさり落とすだけの大胆さ、そしてさらに男装してこの難局を乗り切ろうとする機転を見せており、「賢婦女丈夫」[8)]という表現をまさに体現している。

さらなる逃走劇を続ける清子ではあるが、知己を頼りに横浜から青森へ、そして北海道へと渡る途中船が沈み、ロシア船に救助される。ここから舞台は大陸へと移る。船はウラジオストクに着くが、そこで秘密任務にあたっていた鐵男と再会することになる。しかし、同地の貿易事務官は清子を追う北畠中将とつながる人物であり、清子はさらなる逃走を余儀なくされる。またも男装し、ハルピンから北京へと向かう清子であるが、清子の美貌はロシア人の目にもとまり、ロシア極東総督のヘロバト[9)]と相対することとなる。

> 『貴殿は服を取って裸体におなんなさい』
> 清子は再三再四の請求に否むは反て疑念を生ぜしむる原因と思ひ服を取りて裸体となれり、而して横向きにヘロバトの前に直立しぬ、ヘロバトは清子が裸体となりて急に横向きになりたるを見て
> 『正面を向いて直立なさい』[10)]

異国の、それも軍人の前であっても臆することなく肌を露わにする女性表象は、この時代にあっては大胆なものである。読者は清子の貞操の危機と感じるであろうが、実際にはここではまだヘロバトは清子に対して紳士的な態度を取っている。

と同時に、ここで清子は意思疎通のためにフランス語を喋っている。「極東総督府の参謀部に人物多しと雖も仏蘭西語の操縦自在なるものに至りては参謀長一人のみ」[11)]であり、さり気なく清子の知性が紹介されているのである。[12)]

軍人という立場から清子を通して日本の事情を探るため、また、彼女自身の美貌もあって、ヘロバトは何とか清子を手中に収めようとするが、清子は

この難局も何とか回避し、またも鐵男と再会、二人は稲穂萬次郎[13]なる人物を頼りに「蒙古」[14]にまでたどり着き、そこでようやく安息を得ることとなる。

> 国王も殊の外二人の奇抜なる働きに同情を表せられ是非二人に会ひ度き旨仰せ付けられたり、予て国王は日本の文化に進みしを聞き及びたること一再ならざれば日本人をして宮裡の家庭教師を得んと欲するの念頻りなる[15]

元々国王が親日家であったことも家庭教師として清子を受け入れた理由であろうが、傍線部にあるように、国王が清子と鐵男に興味を抱いたのは二人が蒙古にまで至った経緯である。その「奇抜なる働き」、すなわちこれまで作中で繰り広げられてきた清子の大立ち回りによって、彼女は異国の地の、それも宮廷での家庭教師という職を得たのである。そして、その過程において、清子は彼女自身が持っていた度胸や機転、そしてフランス語を話せるという確かな知識を提示しており、これによって、彼女が異国の地で摑んだその職に相応しい人物であることに説得力が与えられているのである。

清子の「遍歴」こそが『臥龍梅』という作品を支えている。だからこそ、長く地を這い、その末に花開く『臥龍梅』という元の婉曲な題名から、再販するにあたってより直截的な『旅の佳人』へと変更したのではないだろうか。この遍歴こそが作品の読み物としての面白さ、そして彼女が異国の宮廷で家庭教師の職を得るに足る人物であることを保証しているのである。

2.「移民」で閉じる物語 ——清水紫琴「移民学園」(1899年)

本稿は『臥龍梅』について考察することを主眼としているが、同じく女性が遠方の地にて教師の職に就くという筋を伴う作品、清水紫琴の「移民学園」(『文藝倶楽部』1899年8月)にも触れておきたい。この作品には、いわ

ゆる「新平民」が登場しており、島崎藤村が「破戒」を出版する六年も前であるという、その点において知られる作品である。[16] 紫琴は自身の最初の結婚生活に材を採った「こわれ指環」が有名だが、「移民学園」も上記の「新平民」が登場するという意味において重要な作品と目されている。

奇しくも主人公が同じ「清子」という名を負う二作であるが、その「清」が意味しているところは異なる。「移民学園」の場合、清子が「新平民」の血を継いでいるということがこの名の背景にあることは間違いない。すなわち、「新平民」＝「穢」という図式を覆すための「清」子という名なのである。一方、『臥龍梅』のそれは何を示しているのか。これまで見てきたように、かなり年の離れた軍人に狙われ、その追手の包囲網は大陸にまで伸びている。また、その追手を振り切った後、今度はロシア人たちが彼女を追い求める。そのような追手の手に落ちず、「清」い存在であり続けること、それを彼女の名は示しているのである。幾度も身に降りかかる危機をいかに回避し、「清」いままで意中の男性の元に辿り着けるのか。『臥龍梅』の清子の遍歴は、一節で見たような女性家庭教師としての資質を示しているだけではないのである。

冒頭に挙げた拙稿の中でも触れているが、日清戦争の前後あたりから日本においても「移民」というものについて真剣に考えられるようになっていった。それを反映してであろう、文学作品においても海外へと渡るという形で終わる作品も、少なくない数のものが作られた。それを「雄飛」と捉えるべきか、「落魄」と捉えるべきか、各々の作品によって姿勢は異なるが、「移民学園」の題名自体に「移民」という語句が使用されているのも、そういった時代を背景にしていると言える。言文一致の時代がすでに到来しているにもかかわらず古めかしい文体で書かれている作品だが、同時代的な感覚で書かれた作品なのである。

主人公・清子は今をときめく大臣の夫を持つが、行方知れずの父が病気であるという手紙を受け取り、父との再会を経て、彼が被差別地域出身の母と出会い、生まれたのが自分であるという事実を知る。夫はそれを理由に離縁

するという選択肢を選ばず、大臣の位を辞し、清子とともに北海道へと渡り、「新平民」の子女を集めた学校を作ろうというところで物語は終わる。

> 人は女々しと笑はば笑へ。人道の為、しばらく身を教育事業に転じつつ、おもむろに時機を待つべしとて。あらゆる資産と共に、身を北海道に移しけるも。稚きより境遇が生む自棄の子の、あはれ全国そこここに散りしけるを、移民学園てふ名の下に一括し。土地と共に心さへ新しき民にして育てむとて。あらゆる新平の子女を我が手に贖ひ得つ。おのれは父よ、清子は母よと笑語一番。衆家族を率ひて出で立ちしを。上野だに見送りしは、二三の高士のみとぞ聞こえし。[17)]

上記の結末は北海道という「国内」[18)]への移住であって、「破戒」で瀬川丑松がテキサスに向かうことが示唆されているように日本の範の及ばない地域にまで向かうものではない。また、川端俊英が指摘しているように、『破戒』に至る明治の部落問題文芸作品には作品構成のパターンに特徴を見出すことが出来、[19)]このような形で「差別からの逃避・脱出」を志向する作品自体は他にも存在する。しかし、「移民学園」以降の、女性教師が海外に赴任するという筋を持つ作品と比較すると、「二三の高士のみ」にしか見送られない寂しい離京ではあるが、この結末は必ずしも暗い未来を示してはいない。ここで注意しなければならないのは、この離京が清子単独ではなく夫も一緒であること、そして、女性教師である以前に清子の立場はその学園の経営者の妻であるということだ。ゆえに、他の作品のように、寄る辺もない女性教師が海の向こうに可能性を求めるというものではない。これは『臥龍梅』にも共通するところであり、『臥龍梅』の主人公も、夫ではないものの途中から男性と合流してそのまま蒙古にまで向かう。女性が海を渡るという行為において、一人であるのか、男性と行動をともにしているかは、物語におけるその女性の未来を考える上で重要なファクターなのである。

「移民学園」ではまた、傍線を附した部分のように、二人にとっての北海

道は終の棲家と覚悟するまでの場所としては認識されていない。いつかこの差別が消え去った時、捲土重来の時を待つ場所とされており、そのためにこそ遠くはあるが再び戻れる場所、北海道が舞台として設定されているのである。田山花袋の「女教師」が台湾の土になることを覚悟した上で日本を離れることになるのとは、その意識に格差がある。このように、教師として赴任していく女性たちの姿が恋に敗れたその果てとして作家たちによって構成された時、その女性教師の未来は見えないように描かれており、それもまた、海に渡る女性教師の表象を否定的なものにしているのである。

一方、『臥龍梅』はどうであろうか。清子は異国の地でその国の宮廷の家庭教師となるが、「此国に暫時滞在する事とはなれり」[20] とあり、この国に長居することは想定されていない。それまで清子は、東京→横浜→青森→ウラジオストク→ハルピン→蒙古と移動し続けており、ここもあくまでその通過点にすぎないのである。

> 其後日露にはげしき戦争ありて日本の勝利に帰しポースマウスの談判にて平和の局を結びしが此翌月清子は蒙古女王を留学生として引き連れ帰国致し鐵男は戦功により金鵄勲章功四級に叙せられ北畠中将は旅順口にて戦死し鐵男清子の両人は宿望の目的に近寄りぬ[21]

女性教師が渡った地でその後どうなるのか分からぬまま幕を閉じることが多いのに対し、『臥龍梅』ではその後帰国することが明確に語られる。実際には河原は最初のモンゴル人留学生を送り込んではいる[22] ものの、国王や王妃を伴って帰国したという事実はなく、暹羅に渡った安井にしても最初のタイ人留学生四人が来日したのはそれ以前、1903年のことである。[23] 日本が女性教師を派遣した時代は、同時に日本にアジアの国々から留学生が派遣されるようになった時代でもあった。彼女たちが連れ帰ったわけではないが、「蒙古王」佐々木照山が同じ蒙古のトルホト郡王を伴って帰国しており、しかもそれは『臥龍梅』刊行のわずか半年前であった。[24] おそらく大月はこの

事実も踏まえ、全てを清子という一人の女性に仮託しているのである。『臥龍梅』は、海外で成功を収めた女性が晴れて凱旋するという、極めて珍しい幕の閉じ方をしているのだ。

『臥龍梅』を「移民学園」と併せて見ることにより、海を越えた女性が帰国するという結末自体が極めて珍しいことが浮き彫りになる。しかも、海外の宮廷での家庭教師という地位の獲得は、結婚を忌避しての逃亡というそもそもの汚点を払拭しており、普通否定的に見なされる「逃避」という行動が、彼女の場合むしろ肯定的に作用しているという、逆転現象が起こっているのだ。

3. 移動が紡ぐ物語 —— Charlotte Brontë, *Villette*（1853）

上で取り上げた二作、そしてそれ以外の作品でも見られる、女性教師が海外へと渡るというモチーフであるが、総覧するとある一つの共通点を見出すことが出来る。それは、その海へ渡るという行為が行われるのが物語の結末においてであるという、奇妙な一致である。その渡った地において彼女の身に降りかかる苦労は、それまでに彼女が経験したものと遜色ないものとして描くことはいくらでも可能であるように思えるが、作者の筆は決してそこから先に進むことはない。これは、女性教師が海外へ行くことを肯定的に捉えているものでも、恋愛に敗れた末の逃避として否定的に捉えているものでも軌を一にしている。なぜ作家たちは彼女たちのその後を描かないのであろうか。

19世紀半ば、中間層が急速に力を得たイギリスでは、子どもたちの教育を住込みの女性家庭教師に任せることが半ば社会制度として確立していた。社会に新たに登場した、単純労働ではない、知的労働を担う女性たち——ガヴァネスの存在は、実社会の反映でもある小説にもしばしば登場するようになった。今日から見て「ガヴァネス小説」と呼びうる一連の小説には一定の共通性が見られる。「ガヴァネス小説というジャンルの中では、作者の目的

はしばしばガヴァネスと雇い主との関係を論議するところにあ」[25]り、「一般的に、教室内の活動は、教室外で進行するものと比べてガヴァネス小説ではさほど筆を割かれない。（…）ガヴァネスを教師として描くことにその主な動機があるのではなく、読者の前に教室外での彼女の生活を提示することにある。」[26]ガヴァネスの実際の仕事には興味がなく、家庭の中にその家庭の構成員ではない人物が加わることで引き起こされる出来事が物語の中心となっていくのであり、ガヴァネス小説の場合、むしろ家庭教師になること自体が物語の推進力となっている。

そのようなガヴァネスが登場する小説でも、海外へと渡り、そこでガヴァネスとして雇用されるという筋書きのものがいくつかある。

> ガヴァネスは文字通り境界線を越えた。*Villette*では、Lucy Snoweは私立学校でのガヴァネスとして海外で職を得た。一方、Mrs Henry Woodの*East Lynne*では、Isabel Vaneはイングランドで彼女自身の子供たちのために同じ役割を果たすために（変装して）帰国する以前、大陸でガヴァネスとして活動している。地理的同様社会的に移動可能であり、ガヴァネスは極端で急激な地位変動の主題となる傾向にあった。[27]

ここでCharlotte Brontë最後の作品、*Villette*を取り上げたい。この作品は作者自身が海外、ブリュッセルに滞在した経験を踏まえていると言われており、ラバスクールの首都、ヴィレットなる架空の地での物語という形で作品に生かされている。主人公Lucy Snoweがロンドンへ、さらには海を渡りヴィレットの寄宿学校で英語を教える教師の職を得ることで物語は進んでいく。ロンドンに行く以前から、Lucyが将来的に海外へと渡るであろうことはすでに仄めかされている。

> 'and,' added Mrs. Barnett, 'she says there are many Englishmen in foreign families as well as she.'

> I stored up this piece of casual information, as careful housewives store seemingly worthless shreds and fragments for which their prescient minds anticipate a possible use some day.[28)]

まさかその「情報」が実際に役立つとはこの時点では思っていなかったという体裁を採ってはいるが、実際にはかなり早い段階でLucyが海外に渡ることは運命づけられていることが分かる。

Charlotteが男性名で発表し、最初に名声をつかんだ*Jane Eyre* (1847)もまた、海外にこそ行かないものの、引き取られた叔母の家からローウッド寄宿学校、そして後に結婚することになるロチェスターが家主のソーンフィールド邸、さらには荒野を彷徨った後に牧師セント・ジョンの元へ、そして最終的にはまたロチェスターの元へ、というように、移動が物語を生み出している。

ガヴァネス小説を移動が生み出す物語と規定するならば、日本ではその移動という行為は物語の推進力にはならず、最終的に恋に敗れた上で、「移民学園」の場合は被差別部落出身であるという世間の反発からの逃避として、移動することが物語の最後になって選択されている。これを日本で独自に形成された一つの類型と見なすことも出来よう。

翻って『臥龍梅』に目を転じると、女性が一人で移動し続けていくことがこの物語の推進力となっているということは間違いない。ただし、この場合ガヴァネス小説のように職を得るために移動を選択するわけではなく、あくまで嫌な結婚から逃れるためである。『臥龍梅』は、女性教師の海外派遣という当時実際に行われた状況を踏まえてのものであるが、日本ではイギリスのようにガヴァネスが社会に認知されているわけではなく、ゆえに女性の移動が彼女が職を得るための契機となりうることも認識されていなかった。女性教師の海外派遣という現象を作品に取り込むにしても、その地位を手に入れることを目的とする物語とはならず、海外で女性教師となることは、形は異なれども最終的な結果にすぎないというのは『臥龍梅』も他の作品と同様

である。しかしながら、女性が一人で移動し続け、それが彼女の強さとなっていくという物語が、明治の日本にあっては極めて珍しい図式のものであるということは、現代から見て評価できるものではないだろうか。

おわりに

先に触れた*Villette*では、主人公が移動を決心する場面は次のようである。その視線の先ははっきりとロンドンを捉えている。

> A bold thought was sent to my mind; my mind was made strong to receive it.
> 'Leave this wilderness,' it was said to me, 'and go out hence.'
> 'Where ?' was the query.
> I had not very far to look; (...) I saw London.[29)]

*Jane Eyre*もそうであるが、移動を決心する時、彼女たちは必ず自分の「内なる声」に従っている、すなわち自己決定権を持っているのである。[30)]

日本の作品の場合はどうであろうか。これまで見てきたように、海へと渡る決定を下したのは確かに彼女たち自身である。だが、そのような決定を下すに至るには、そう選択せざるをえなくなってしまった彼女たち自身の物語がある。日本において作品として結実したのは、海外で教師として職を得ることになった、それまでの経緯なのである。この日英の作品における差は、すでに海外に領土を持って久しいイギリスと、国外に目を向けるようになって間がない日本の差、すなわち、女性が一人でも海外へ行くことが珍しくなくなった社会と、それを物珍しいと捉える社会との差と言えるであろう。だからこそ、日本では女性がわざわざ一人で海外へ赴任する場合、彼女がそのような決定を下すに至るまでが物語化される傾向にあり、さらにはそれが類型にまでなっているのである。

『臥龍梅』はそのような日本にあって例外的に、女性が移動することそれ自体に主眼がある。だが、清子の移動に自己決定権があるかというと、それには疑問が残る。そもそもの彼女の逃げるという選択であるが、鐵男とは親友である兄・皎の「到底も只今の急場お前が此処に居ては不可、断然いかん」[31]という言葉に促され、横浜の友人・小松原正子を頼ったまでは、確かに彼女自身が決めた結婚から逃げるための方策である。しかし、その後彼女が逃れ続けていくのは、乗っていた船が沈没したり、彼女を救助したのがロシア船であったり、そこから逃げ出してもまた変装がばれて結局また逃亡したりと、偶然に左右されるところが大きい。ゆえに、自己決定を清子が下しているというより、運命に翻弄される女性という印象の方が強い。この方が当時の読者にとって受け入れやすかったのであろうし、それをこの作品の限界と断じることもできるであろう。

しかし、海外に渡ってそこで女性が職を得、さらにはそれを成果として日本に帰還するという物語は、時代に先行している。[32] これを以てみても、『臥龍梅』は時代の徒花として見捨ててしまうには惜しい作品であり、日本における女性家庭教師の表象という意味でも特異なものとなっているのである。

［注］

1) 詳細は拙論「日本から海を渡った女教師たちとその表象」(橋本順光編著『「卓越」セミナー第2回（コンフリクトの人文学セミナー第86回）「世紀転換期の日英における移動と衝突―諜報と教育を中心に」報告書』、2013年3月）を参照されたい。

2) わずかながらでも大月隆という人物を取り上げたものとして、斉藤英子編『大正デモクラシー期・昭和初期論文集　菊地茂著作集　第三巻』(早稲田大学出版部、1984年）に収録の、菊地松堂「理想の大臣」に附された解説がある。編者の斉藤氏は明治から昭和期に活動した菊地松堂こと茂の五女にあたり、この「理想の大臣」を出版したのが、『臥龍梅』の版元で、大月が経営していた文学同志会であった。ただし、氏を以てしても、「(…) 文学同志会ではあったが、その存在は、明治二七年から明治末年ころまでしか知ることが出来ない。また、同会主人・大月隆の経歴についても、その記録が現在のところ全く無い。彼の著作の中から僅かに知り得るのみである。」氏は『人生の初旅』(1898年）『人生の悔悟』(1899年）に書かれている大月の経歴を紹介している。

それによると、大月は明治元年、或は慶応3年頃、長野県筑摩郡山形村（？）の出身で、没年は分からない。15歳の年に養家である伯父夫婦の家を出、上京、『東京日日新聞』（？）と関わって、苦学をしながら某語学校のドイツ語科に学び、卒業後は『日日新聞』（？）の外事係となった。明治27年ごろ文学同志会を創立。斉藤氏も述べられているように、同会は社会評論、人物評論や、文学評論、評伝、合同詩集、実用書、啓蒙書、古典文学の刊行を主たる業務としていた。文学史からは遠く置き去りにされた文学同志会ではあるが、元々増子屋書店から出されていた石橋哲次郎（愚仙）編の詞華集、『山高水長』（1898年）の版元を引き継いでいる。これは、国木田独歩や田山花袋、宮崎湖処子、佐々木信綱らの詩、そして、まだ養子に入る以前、松岡姓を名乗っていた時分の柳田國男の作品も収録された、「当時の新体詩家の代表的なアンソロジー」（『日本近代文学大事典　第六巻』講談社、1978年）である。

3）『日本近代文学大事典　第一巻』（講談社、1977年）に「大月隆仗（たかより）」という項目がある。岩野抱鳴の弟子として、また、日露戦争従軍記『兵車行 兵卒の見たる日露戦争』などでも知られる人物である。「大月隆仗」の項目の解説には「小説家。岡山県生れ。別号隆、乗山高陽。東洋大学哲学科卒。（…）『文学の調和』（明二七・二　岩藤錠太郎）『美妙』（明二九・一　文学同志会）『文学の審美』（明三六・一　文学同志会）などが著名。」とあるが、これらの著作は隆仗のものではなく、隆のものである。隆仗は1883（明治16）年生まれで、もし隆仗＝隆とするならば、隆はわずか10歳そこそこで著書を出し、出版社を興していることになる。そもそも隆自身が明治初年度の生れであると明かしているため、たまたま本名が同じであったか、混同しているのか、そのどちらかである。おそらくこの記述に則ってであろう、谷沢永一が『国文学　解釈と鑑賞』に「探書燈」として連載し、後に一冊の書籍として上梓した『遊星群』（和泉書院、2004年）の中で大月隆の著作を計四度紹介しているが、いずれも「大月隆（隆仗）」となっている。

4）一例を挙げると、『都新聞』では、後に大逆事件で処刑されることになる土佐藩出身の奥宮健之とは兄弟であり、森林黒猿名義で講談を担当していた奥宮健吉が日露戦争関連の作品を連載したり、伊原青々園が「濁土皇帝」（1904年）を、遅塚麗水が「桂姫」（1905年）を発表したりなどしていた。日露戦争当時の文学の状況に関しては、稲垣広和「日露戦争意識と記憶―戦場非在者の戦時記憶・漱石の場合」（東アジア近代史学会編『日露戦争と東アジア世界』ゆまに書房、2008年）などに詳しい。

5）大月隆『臥龍梅』（文学同志会、1906年）、21頁。本文中で使用されている旧字は適宜新字に改めている。なお、以降文中で引用を行う場合、附されている傍線は全て論文執筆者による。

6）フェリス女学校は、伝道の目的で来日したメアリー・E.キダーによって1870年に設立された。彼女自身は1910年に亡くなったが、『臥龍梅』刊行の1906年時点ではすでに校長の職を辞していた。彼女の後を継いで二代目校長の職にあったのは作中登場するウイリヤムなる人物ではなく、1881年から1922年まで、40年の長きにわたって

その任に当たったE.S.ブースという人物である。ちなみに、作中聖職者でもあるウイリヤムは、清子に対してロシア正教の危険性について説明し、それが後々清子を苦しめることになるロシア人たちの脅威の伏線となっているのだが、皮肉なことに、実際のフェリス女学校校長であるブースの長男、Frank Stelle Booth（1881-1957）はロシアとの関係が深く、日本、ロシアとの間で漁業経営に携わった実業家であった。第二次大戦中には収容所に入れられ、戦後は日米関係の改善に努めた。『日本人名大辞典』（講談社、2001年）1591頁にブース父子の項目がある。

7） 前掲、大月、82-83頁。

8） 同109頁。

9） ちなみに当時実際にロシア極東総督の任にあったのはエヴゲーニイ・アレクセーエフであり、架空の人物が設定されている。

10） 前掲、大月、126-127頁。

11） 同125-126頁。

12） 清子がフランス語を駆使できるのは、彼女が軍人の家に育ったからであろう。明治期の陸軍では元々外国語として英語ではなくフランス語を教えていた。一方、ロシアでもフランス語を使えることが上流階級の嗜みであった。そのため、ここでは英語ではなくフランス語が共通の言語として設定されたものと考えられる。なお、村井弦斎が英語で書いた*Hana, a daughter of Japan* (1904)でも、日本に滞在中のアメリカ人やロシア人と対等に渡り合える花子は英語を話すことのできる才女として設定されており、日本人女性でも外国語を話せるということは物語の展開において重要な役割を果たしている。

13） この名は明らかに実在の人物、稲垣満次郎（1861～1908）から取っていると考えられる。作中では、日本政府が稲穂に「国書を齎らし且つ商業上の視察として滞在」させており、おそらく彼は政府筋の者であろう。実在の稲垣もまた外交官として活躍していたが、重要なのは彼が暹羅の公使の任にあり、安井てつを暹羅に派遣した責任者の一人であるという点だ。すなわち、『臥龍梅』は舞台が内蒙古であるため河原や鳥居を直接のモデルとしているが、大月は安井の暹羅への派遣も念頭にこの物語を書いたであろうと推測できるのである。なお、稲垣によってなされた日タイ交流の一部に関しては、橋本順光「近代日本におけるタイ旅行記研究のための覚書」（橋本順光編著『研究者海外派遣基金助成金（組織的な若手研究者等海外派遣プログラム平成21年度公募）「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」「日本・タイ相互交流の文学研究のために」報告・論文集』、大阪大学大学院文学研究科、2010年）61-62頁、佐藤照雄「明治後期の対タイ文化事業――稲垣満次郎と仏骨奉迎事業を中心として」（『アジア太平洋研究科論集』19号、早稲田大学大学院アジア太平洋研究科出版・編集委員会、2010年）を参照。

14） 厳密に言えば、清子たちがたどり着いたのは、実際に河原や鳥居が派遣された内蒙古

であろう。しかし、本文で後に触れる「蒙古王」と呼ばれた佐々木安五郎（照山）が、トルホト王を日本にまで連れてきた功績によってそう呼ばれていたように、現在中国領である内モンゴル自治区を示す「内蒙古」と、独立国であるモンゴルを示す「外蒙古」との区分は、新聞等では分けて紹介されはしていたものの、当時の日本人にとっては曖昧なものであったのではないだろうか。以下、本文に倣って「蒙古」とする。

15）前掲、大月、178-179頁。

16）「移民学園」と「破戒」との影響関係はかねてより論議されている。古くは笹淵友一「島崎藤村と自然主義」（『東京女子大学比較文化研究所紀要』第4号、1957年）、また、「移民学園」も含めた「部落問題」を扱った先行作品を取り上げたものに、川端俊英「『破戒』と先行部落問題文芸」（『同朋国文』第14号、1981年）や渡邊澄子「『移民学園』と『破戒』」（『人文科学』第4号、1999年）などがある。

17）古在由重編『紫琴全集』（草土文化、1983年）、231-232頁。

18）北海道を「日本」とみなす意識に関しては、小熊英二『〈日本人〉の境界 沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮：植民地支配から復帰運動まで』（新曜社、1998年）50-69頁を参照。北海道には囚人を送り込んで開墾を請け負わせていたという、イギリスにおけるオーストラリアのような意味を担っていた時代もある。

19）川端前掲論文、98-100頁。

20）前掲、大月、180頁。

21）同181頁。

22）娜荷芽「清末における「教育興蒙」について―内モンゴル東部を中心に―」（『アジア地域文化研究』第7号、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部アジア地域文化研究会、2010年）68頁。

23）タイ人留学生に関しては、平松秀樹「日・タイ文学にみる良妻賢母―周辺の言説とともに」（『タイ国 日本研究国際シンポジウム2007 報告書』、チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座、2007年）、同「ククリット・プラモート『シー・ペンディン（王朝四代記）』と“クンラサトリー”：タイ近代女子教育の日本との関わりの考察とともに」（『待兼山論叢 文学篇』第42号、2008年）などでも取り上げられている。

24）横田素子「1906年におけるモンゴル人学生の日本留学」（『東西南北』、和光大学総合文化研究所、2009年）161-166頁参照。トルホト郡王パルタは中国人陸軍学生のための特設予備教育機関である振武学校に留学したが、一人ではなく、王妃や王子も来日していたようである。

25）Lecaros, Cecilia Wadsö. *The Victorian Governess Novel*. Lund University Press, 2001, p.31.

26）p.135.

27）Lustig, T.J.. *Henry James and the Ghostly*. Cambridge University Press. 1994, p.150.

28）Brontë, Charlotte. *Villette*. *Life and works of the Sisters Brontë. Volume III*, New York: AMS Press, 1973, pp.48-49.

29） p.47.

30） 日本における *Jane Eyre* の初期受容において、女性であるジェーン自身の‘I’のモノローグによってなされる物語であることを翻訳者が認識していなかったことについては、拙稿 “*The “Japanized” Translation of Jane Eyre*”（橋本順光編著『研究者海外派遣基金助成金（組織的な若手研究者等海外派遣プログラム平成21年度公募）「多言語多文化研究に向けた複合型派遣プログラム」「日本・タイ相互交流の文学研究のために」報告・論文集』、大阪大学大学院文学研究科、2010年）にて論じている。

31） 前掲、大月、45頁。

32） ただし、実際にはかなりの数の女性が海を渡っていたという事実がある。いわゆる「醜業婦」という形で、である。当時の新聞においても問題として取り上げられているが、女性教師の海外派遣と同時期に、すでに売買春のために海外へと渡らざるをえなかった女性たちがいたという事実は見過ごしてはならない。

（大学院博士後期課程単位修得退学）

SUMMARY

Kiyoko becomes a Governess at the Mongol Court:
The Representation of Governess in Otsuki Takashi's *Ga-Ryo-Bai* ('The Sleeping Dragon Plum', 1906)

Reiji Kohashi

At the turn of the twentieth century, some Japanese organizations led by women were sending Japanese schoolmistresses to the Asian countries. The examples include Kawahara Misako and Torii Kimiko who were sent to Inner Mongolia, and Yasui Tetsu, who was sent to Siam. This phenomenon influenced a number of novels published in those days; however, such novels hardly depicts the voyages of these women as honourable actions, instead as a kind of exile after the experience of unrequited love. One exception is *Ga-Ryo-Bai* (1906), which means 'The Sleeping Dragon Plum'. Otsuki Takashi, the author of this work, who was rather an essayist, and also the owner of *Bungaku-Doshikai*, a publishing company.

This paper examines that how *Ga-Ryo-Bai* deals with the representation of Japanese governesses who serves at a foreign court. The protagonist, Kiyoko, rejects the undesirable marriage with an elderly army officer. She secretly gives her heart to Tetsuo, her brother's friend, but continues her journey, and happens to cross the sea. Pursers sent by her elderly fiancé and Russians stalk her constantly; nevertheless, she and her lover Tetsuo move to Mongolia and she becomes a governess at the court. It can be pointed out that some peculiarities of the representation of the governess- or schoolmistress-across-the-sea in Japanese novels. Further, the paper clarifies the uniqueness of the representation given in *Ga-Ryo-Bai*.